初心にかえる

― 奈良はジャックナイフのように……。―

本誌の前身は『ＮＡＲＡＳＩＡ Ｑ』（２０１２年３月創刊）と言う。ＮＡＲＡＳＩＡとは、ＮＡＲＡとＡＳＩＡが縦横に結びついた歴史と、その中で紡ぎだされ・波及した日本の複合的な文化・文明の特色を表現した造語である。『ＮＡＲＡＳＩＡ Ｑ』は、そのようなＮＡＲＡＳＩＡの多様な歴史文化がもたらしたダイナミズムを、あらためて「日本最古の首都」の流れと仕組み―これを「飛鳥諸宮―藤原京―平城京」モデルと名付けた―をレセプターとして、われわれが普通に親しんでいるヒト・モノ・コトの新たな価値を見いだそうという意気込みで編集されてきた。

本誌『ＥＵＲＯ-ＮＡＲＡＳＩＡ Ｑ』は、ＮＡＲＡＳＩＡという縦横の歴史と複合の文化の範囲を少し―西方に―拡張しただけで、前身誌の趣旨や創刊以来の覚悟は、そのまま継承している。

さて、『ＮＡＲＡＳＩＡ Ｑ』の創刊は、「東日本大震災」からちょうど１年後にあたっていた。『ＮＡＲＡＳＩＡ Ｑ』はわずか64ページの小さな体に、喩えようのない哀しみと「決意」を抱えていた。これを当時、編集責任者は、次のように表現した。

３月11日以降、『母国』ということをしきりに思うようになった。母国の面影は荒れたものを偲ぶことによって、また喪失によって立ちあらわれる。母国大和は、東北の陸奥（みちのく）と南国の琉球をちょうど折り返した地点に、ジャックナイフのように錘（おもり）をおろしている。

本誌12号でも触れたこと（表紙裏）なので、これ以上は繰り返さない。

だが、ＮＡＲＡＳＩＡの英知が結集された「日本最古の首都」は、同時に、「中央―地方の問題」をつくりだした「張本人」であり、奈良・大和は、今日の地方の課題に正面から向き合うキャパシティと責任を表裏に背負っている、このことだけは再度強調しておきたい。

本誌発行から５年を経た今、あらためて初心に立ち返る。『ＮＡＲＡＳＩＡ Ｑ』以来の本誌の意義と意気込みと、哀しみと「決意」を込めて、第16号をお届けします。

（編集責任者　中島敬介）